

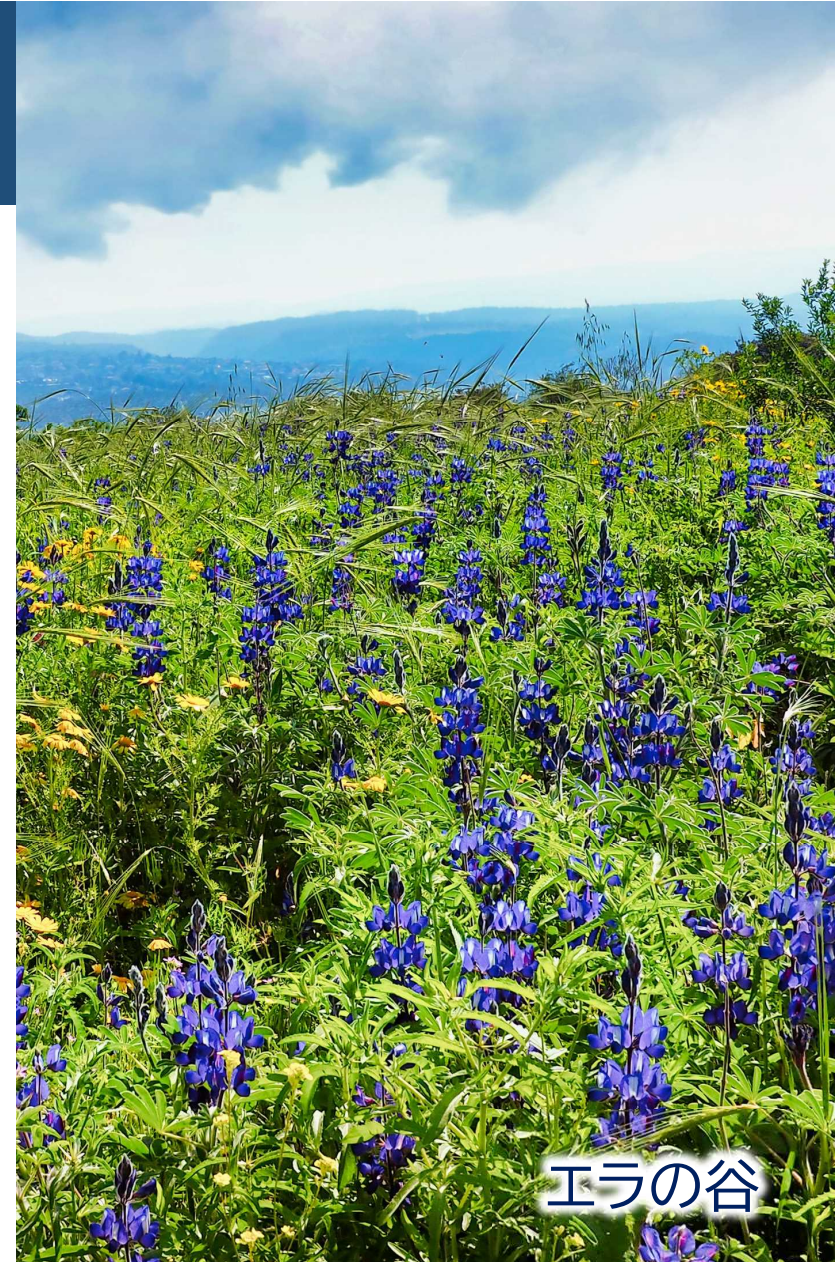
1
ダビデ
聖徒伝 85

「戦うべきは 主の戦い」

I サムエル記16～17章 ダビデの油注ぎ・ゴリヤテとの戦い

アウトライン

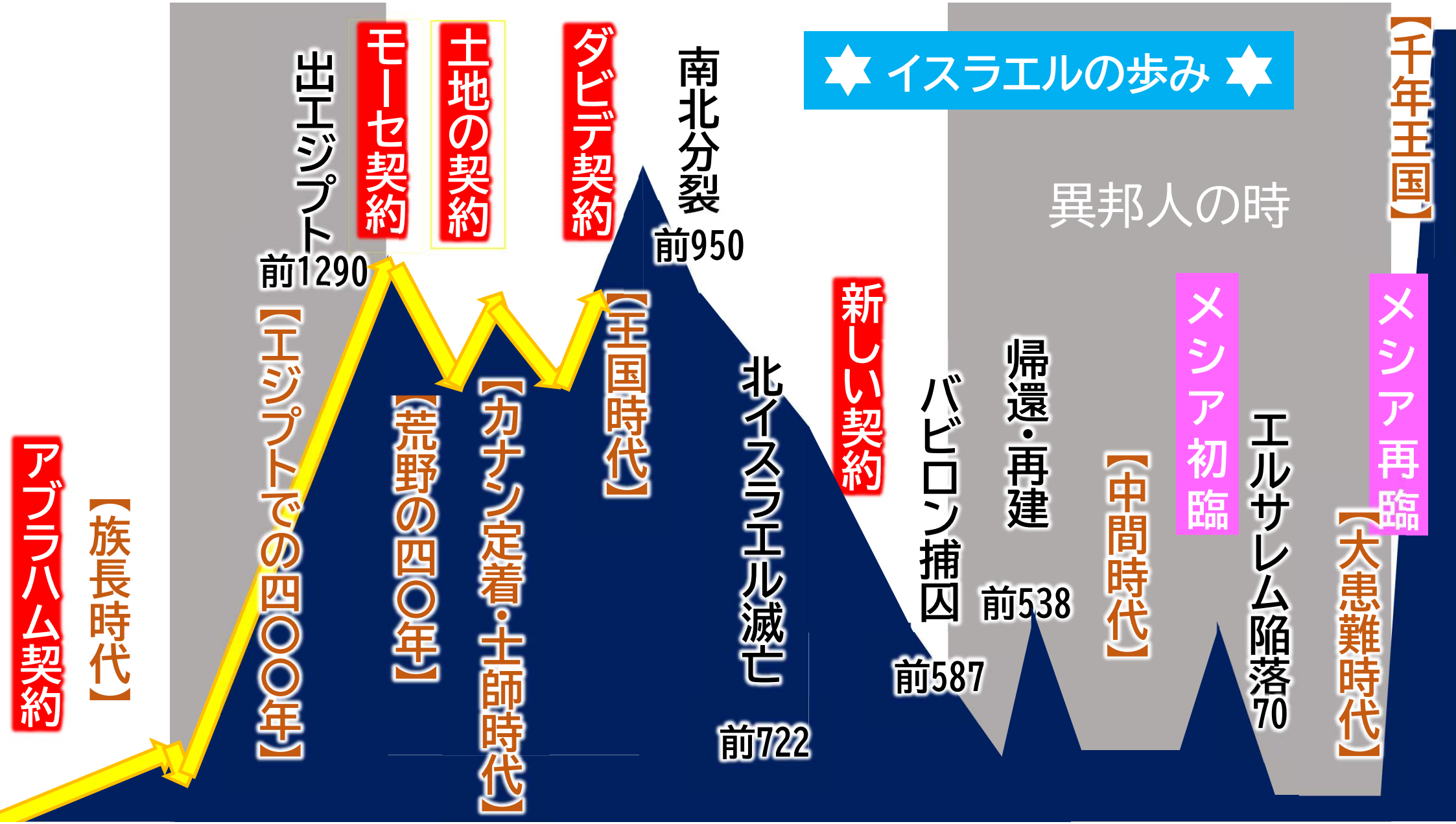
- 0. イントロダクション
 - I. ダビデの油注ぎ 16章
 - II. ゴリヤテとの戦い 17章
 - III. まとめと適用
- 信仰の武具を身につけて



エラの谷



★ イスラエルの歩み ★



サムエル記 第一	士師時代	サムエル	1:1～2:11	サムエルの誕生	サムエル
			2:12～3:21	サムエルの召命	
			4:1～7:17	奪われた契約の箱	
			8:1～9:27	後継者不在 王を求める民	
	王政時代	サウル	10:11～11:15	油注ぎ	
			12:1～25	士師サムエルの民への告別	
			13:1～15:35	王が重ねた神への背き	
		ダビデ	16:1～13	油注ぎ	
			16:14～23	王宮での奉仕	
			17:1～58	ゴリヤテとの戦い	
			18:1～30	サウルの娘ミカルとの結婚	
			19:1～26:25	荒野の逃亡の日々	
			27:1～30:31	ペリシテ人の地で	
			31:1～13	サウルの死	
					サウル
					ダビデ

【サウルの油注ぎ】 I サムエル8～10章

- 背信と混沌の士師の時代、最後に立てられたサムエルは、イスラエルを民族的悔い改めに導き、40年間、裁き治めた。
- イスラエルは、真の王である神を退け、自分たちの上に立つ人間の王を願った。神は、許容的御心によって、願いを聞かれた。
- 神は、ベニヤミン族のサウルを王に選ばれた。サウルは、サムエルに油注がれ、王となった。
- 「油注ぎ(メシアツハ)」が、メシアの語源。



【サウル王の治世】 I サムエル11～15章

- イスラエルの誰よりも背が高く美しい王サウル。しかし、その治世は長続きしなかった。
- 祭司のみに許されたささげ物を行ったために、サウルから子孫に続く王の系譜は断たれた。一代限りの王に。
- さらに、アマレク人を聖絶せよという神の命令に背き、王権すら剥奪されてしまった。
- 神は、サウルに代えて、御心に叶った真実の王を立てられる。それが、エッサイの子、ダビデ。





I. ダビデの油注ぎ

I サムエル記16章

ベツレヘム近郊

【主の呼びかけ】 I サムエル16:1

【主】はサムエルに言われた。「いつまであなたはサウルのことで悲しんでいるのか。わたしは彼をイスラエルの王位から退けている。角に油を満たせ。さあ、わたしはあなたをベツレヘム人**エッサイ***のところに遣わす。彼の息子たちの中に、わたしのために王を見出したから。」

***エッサイ** …ルツの夫ボアズの孫。ダビデはひ孫。

■ サウル王の罪を悲しんでいたサムエルに、主は、本当の王を見いだしたと告げた。



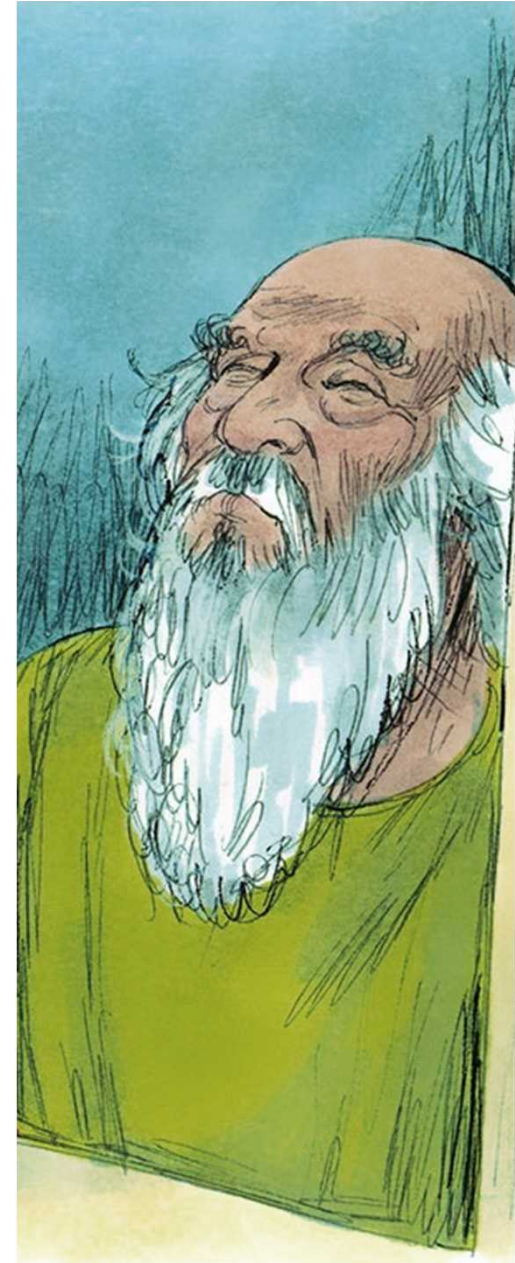
【神の提言】 I サムエル16:1～3

サムエルは言った。「どうして私が行けるでしょうか。サウルが聞いたら、**私を殺すでしょう。***」【主】は言われた。「一頭の雌の子牛を手にし、『【主】にいけにえを献げるために来ました』*****と言い、エッサイを祝宴に招け。わたしが、あなたのなすべきことを教えよう。あなたはわたしのために、わたしが言う人に油を注げ。」

***** 己の王座を脅かす者は、神の預言者サムエルであらうと殺害をも辞さない。

➡ **罪の極みに陥ったサウル王の姿。**

***** 主が、恐れるサムエルに授けた知恵。



【ベツレヘム訪問】 I サムエル16:4~5

サムエルは【主】がお告げになったとおりにして、ベツレヘムにやって来た。町の長老たちは身震いしながら*彼を迎えて言った。「平和なことでおいになったのですか。」

サムエルは言った。「平和なことです。【主】にいけにえを献げるために来ました。身を聖別して、一緒に祝宴に来てください。」そして、サムエルはエッサイと彼の息子たちを聖別し、彼らを祝宴に招いた。

***指名手配犯でも来たかのような態度!!**

➡サウルのサムエルへの敵意は周知の事実。



【主の忠告】 I サムエル16:6～7

彼らが来たとき、サムエルはエリアブを見て、「きっと、【主】の前にいるこの者が、主に油を注がれる者だ*」と思った。【主】はサムエルに言われた。「彼の容貌や背の高さを見てはならない。わたしは彼を退けている。人が見るようには見ないからだ。人はうわべを見るが、【主】は心を見る。*」

*サムエルがこう思うくらいの堂々とした容姿だった!?

■人の心を見る主には、私たちとはまったく違う人間の姿が見えているのだろう。



【エッサイの息子たち】 I サムエル16:8～11

■エッサイの息子たちを順に見定めたサムエル。しかし、7人の誰も、主は選んでおられなかった。

■サムエルが探しているのは従者？ 預言者？ まさか王とは、エッサイも息子たちも思わなかっただろう。

16:11 サムエルはエッサイに言った。「子どもたちはこれで全部ですか。」エッサイは言った。「まだ末の子が残っています。今、羊の番をしています。」サムエルはエッサイに言った。「人を遣わして、連れて来なさい。その子が来るまで、私たちはここを離れないから。」



【ダビデの油注ぎ】 I サムエル16:12～13

エッサイは人を遣わして、彼を連れて来させた。彼は血色が良く、目が美しく、姿も立派だった。【主】は言われた。「さあ、彼に油を注げ。この者がその人だ。」

サムエルは油の角を取り、兄弟たちの真ん中で彼に油を注いだ。* 【主】の霊がその日以来、ダビデの上に激しく下った。* サムエルは立ち上がってラマへ帰って行った。

* 油注ぎ …主によって聖別されたダビデ。

* 聖霊が、尋常でない力をダビデに与えたことだろう。

■この時から、神の目には、ダビデが王とされた。

…が、居合わせた父や兄は理解してなかっただろう。



【わざわいの霊】 I サムエル16:14～15

さて、【主】の霊はサウルを離れ去り、【主】からの、**わざわいの霊***が彼をおびえさせた。

サウルの家来たちは彼に言った。「ご覧ください。わざわいをもたらす、神の霊が王をおびえさせています。」

***ルーアツハ・ラー** …同じ語は、士師記9:2くらい。
“**悪霊**”とも訳される。

■悪霊すらも、全知全能の神の許しの範囲で活動。

➡大患難時代に地の四隅を押さえていた天使に命じ、
悪霊の大群を解き放つのも主の御業。



【家来の提案】 I サムエル16:16～17

「わが君。どうか御前におりますこの家来どもに命じて、上手に豎琴を弾く者を探させてください。＊ わざわいをもたらす、神の霊が王に臨むとき、その者が豎琴を手にして弾くと、王は良くなられるでしょう。」

サウルは家来たちに言った。「私のために上手な弾き手を見つけて、私のところに連れて来なさい。」

＊この時代、音楽療法はよく行われていたらしい。



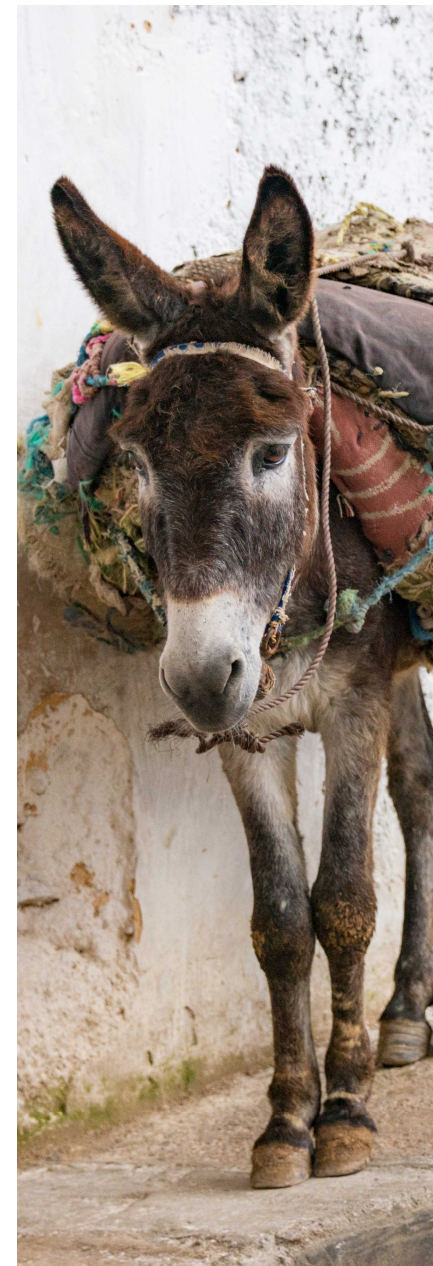
【王に仕えたダビデ】 I サムエル16:18～19

家来の一人が答えた。「ご覧ください。ベツレヘム人エッサイの息子を見たことがあります。弦を上手に奏でることができ、勇士であり、戦士の出です。物事の判断ができ、体格も良い人です。【主】が彼とともにおられます。＊」

サウルは使いをエッサイのところに送って、「羊とともにいるあなたの息子ダビデを、私のところによこしなさい」と言った。エッサイは、ろば一頭分のパンと、ぶどう酒の皮袋一つ、子やぎ一匹を取り、息子ダビデの手に託してサウルに送った。

＊聖霊に満たされたダビデの評判が広がっていた。

＊エッサイは、礼を尽くして王の元に息子を送った。



【ダビデの豎琴】 I サムエル16:21～23

ダビデはサウルのもとに来て、彼に仕えた。サウルは彼がたいへん気に入り、ダビデはサウルの道具持ち*となった。

サウルはエッサイのところに人を遣わして、「ダビデを私に仕えさせなさい。気に入ったから」と言った。

神の霊がサウルに臨むたびに、ダビデは豎琴を手にとって弾いた。するとサウルは元気を回復して、良くなり、わざわざの霊は彼を離れ去った。

*王に仕える側近。護衛を担う者もいた。





Ⅱ. ゴリヤテとの戦い

I サムエル記17章

エラの谷

【ペリシテとの戦い】 I サムエル17:1～2

ペリシテ人は戦いのために軍隊を召集した。ユダのソコに集まり、ソコとアゼカの間にあるエフェス・ダミムに陣を敷いた。

一方、サウルとイスラエル人は集まってエラの谷に陣を敷き、ペリシテ人に対する戦いの備えをした。

ペリシテ人は向かい側の山の上に構え、イスラエル人は手前側の山の上に構えた。その間には谷があった。

■エラの谷は、ベツレヘムの真西へ、20kmほど。



エラの谷



【戦士ゴリヤテ】 I サムエル17:4

一人の代表戦士が、ペリシテ人の陣営から出て来た。その名はゴリヤテ。ガテの生まれで、その背の高さは六キュビト半(約286cm)。

頭には青銅のかぶとをかぶり、鱗綴じのよろいを着けていた。胸当ての重さは青銅で五千シェケル(約57kg)。足には青銅のすね当てを着け、背には青銅の投げ槍を負っていた。槍の柄は機織りの巻き棒のようであり、槍の穂先は鉄で、六百シェケル(約6.9kg)あった。盾持ちが彼の前を歩いていた。

■巨大で頑強で武具の扱いにも長けた最強戦士。



【戦士ゴリヤテ】 I サムエル17:8～11

ゴリヤテは突っ立って、イスラエル人の陣列に向かって叫んだ。「何のために、おまえらは出て来て、戦いの備えをするのか。おれはペリシテ人、おまえらはサウルの奴隷どもではないか。一人を選んで、おれのところによこせ。おれと戦っておれを殺せるなら、おれたちはおまえらの奴隷になる。だが、おれが勝ってそいつを殺したら、おまえらがおれたちの奴隷になって、おれたちに仕えるのだ。」

そのペリシテ人は言った。「今日、この日、おれがイスラエルの陣を愚弄してやる。一人をよこせ。ひとつ勝負をしようではないか。」

サウルと全イスラエルは、ペリシテ人のことばを聞き、気をくじかれて非常に恐れた。



【このときダビデは？】 I サムエル17:12～15

さて、ダビデは、ユダのベツレヘム出身の、エッサイという名のエフラテ人の息子であった。エッサイには八人の息子がいた。この人はサウルの時代には、年をとって老人になっていた。

エッサイの上の三人の息子たちは、サウルに従って戦いに出ていた。戦いに行っていた三人の息子の名は、長男エリアブ、次男アビナダブ、三男シャンマであった。

ダビデは末っ子で、上の三人がサウルに従って出たのである。ダビデは、サウルのところへ行ったり、帰ったりしていた。ベツレヘムの父の羊を世話するためであった。



語り継がれた
ダビデの戦いが17章

【派遣されるダビデ】 I サムエル17:16～19

例のペリシテ人は、四十日間、朝早くと夕暮れに出て来て立ち構えた。

エッサイは息子ダビデに言った。「さあ、兄さんたちのために、この炒り麦一エパと、このパン十個を取り、兄さんたちの陣営に急いで持って行きなさい。

この十個のチーズは千人隊の長に届け、兄さんたちの安否を確認しなさい。そして、しるしを持って来なさい。サウルと兄さんたち、それにイスラエルの人々はみな、エラの谷でペリシテ人と戦っているから。」

■ 兄たちの安否を問うため、遣わされるダビデ。



【訪れた戦陣で】 I サムエル17:20～23

ダビデは翌朝早く、羊を番人に預け、エッサイが命じたとおりに、言われた物を持って出かけた。彼が野営地に来ると、軍勢はときをあげて陣地に向かうところであった。イスラエル人とペリシテ人は、向かい合って陣を敷いていた。

ダビデは、父からことづかった物を武器を守る者に預け、陣地に走って来て、兄たちに安否を尋ねた。

ダビデが彼らと話していると、なんと、そのとき、**あの代表戦士が**、ペリシテ人の陣地から上って来た。**ガテ出身のゴリヤテ**という名のペリシテ人であった。彼は前と同じことを語った。ダビデはこれを聞いた。



エラの谷

【ゴリヤテの脅威】 I サムエル17:24～27

イスラエル人はみな、この男を見たとき、彼の前から逃げ、非常に恐れた。イスラエルの人々は言った。

「この上って来た男を見たか。イスラエルをそしるために上って来たのだ。あれを討ち取る者がいれば、王はその人を大いに富ませ、その人に自分の娘を与え、その父の家にイスラエルでは何も義務を負わせないそうだ。」

ダビデは、そばに立っている人たちに言った。
「このペリシテ人を討ち取って、イスラエルの恥辱を取り除く者には、どうされるのですか。この無割礼のペリシテ人は何なのですか。生ける神の陣をそしるとは。」

兵たちは、先のことばのように、彼を討ち取った者には、これこれをされる、と言った。



エラの谷

【怒るエリアブ】 I サムエル17:28～31

兄のエリアブは、ダビデが人々と話しているのを聞いた。エリアブはダビデに怒りを燃やして言った。「いったい、おまえは、なぜやって来たのか。荒野にいるあのわずかな羊を、だれに預けて来たのか。私には、おまえのうぬぼれと心にある悪が分かっている。戦いを見にやって来たのではないのか。」

ダビデは言った。「私が今、何をしたというのですか。一言、話したただけではありませんか。」

ダビデは兄から別の人の方に向き直り、同じことを尋ねた。すると、兵たちは先ほどと同じ返事をした。

ダビデが言ったことは人々の耳に入り、サウルに告げられた。それで、サウルはダビデを呼び寄せた。*



根っこにあるのは
靈的嫉妬？

すでに道具持ち
だったからこそ！

【ダビデの訴え】 I サムエル17:32～35

ダビデはサウルに言った。「あの男のために、だれも気を落としてはなりません。このしもべが行って、あのペリシテ人と戦います。」

サウルはダビデに言った。「おまえは、あのペリシテ人のところへ行行って、あれと戦うことはできない。おまえはまだ若いし、あれは若いときから戦士だったのだから。」

ダビデはサウルに言った。「しもべは、父のために羊の群れを飼ってきました。獅子や熊が来て、群れの羊を取って行くと、しもべはその後を追って出て、それを打ち殺し、その口から羊を救い出します。それがしもべに襲いかかるようなときは、そのひげをつかみ、それを打って殺してしまいます。」



問題とされたのは
兵士としての経験

尋常ならざる
聖霊の力！

【ダビデの信仰告白】 I サムエル17:36～37

「しもべは、獅子でも熊でも打ち殺しました。この無割礼のペリシテ人も、これらの獣の一匹のようになるでしょう。生ける神の陣をそしたのですから。」

そして、ダビデは言った。「獅子や熊の爪からしもべを救い出してくださった【主】は、このペリシテ人の手からも私を救い出してください。＊」サウルはダビデに言った。「行きなさい。【主】がおまえとともにいてくださるように。」

＊王の前でのダビデの主への信仰告白。

■ 日常的に聖霊の力を体験していたダビデの確信。



【ダビデの武装】 I サムエル17:38～41

サウルはダビデに自分のよろいかぶとを着けさせた。頭に青銅のかぶとをかぶらせて、それから身によろいを着けさせたのである。

ダビデは、そのよろいの上にサウルの剣を帯びた。慣れていなかったので、ためしに歩いてみた。ダビデはサウルに言った。「これらのものを着けては、歩くこともできません。慣れていませんから。」 **ダビデはそれを脱いだ。**

そして自分の杖を手に取り、川から五つの滑らかな石を選んで、それを羊飼いの使う袋、投石袋に入れ、石投げを手にし、そのペリシテ人に近づいて行った。そのペリシテ人は盾持ちを前に立て、ダビデの方にじりじりと進んで来た。



サウルの代理でなく
神の代理として

【侮蔑するゴリヤテ】 I サムエル17:42～44

ペリシテ人は、ダビデに目を留めて彼を見つめ、彼を蔑んだ。ダビデが血色の良い、姿の美しい少年だったからである。

ペリシテ人はダビデに言った。「おれは犬か。杖を持って向かって来るとは。」ペリシテ人は自分の神々によってダビデを呪った。*

ペリシテ人はダビデに言った。「さあ、来い。おまえの肉を空の鳥や野の獣にくれてやろう。」

*この時代の戦いは、神々の戦い。

➡それぞれの神の威厳がかかっている。

舌戦から、すでに
戦いは始まっている



【ダビデの武器】 I サムエル17:45～47

ダビデはペリシテ人に言った。「おまえは、剣と槍と投げ槍を持って私に向かって来るが、私は、おまえがそしたイスラエルの戦陣の神、万軍の【主】の御名によって、おまえに立ち向かう。

今日、【主】はおまえを私の手に渡される。私はおまえを殺しておまえの頭を胴体から離し、今日、ペリシテ人の軍勢の屍を、空の鳥、地の獣に与えてやる。すべての国は、イスラエルに神がおられることを知るだろう。

ここに集まっているすべての者も、剣や槍がなくても、【主】が救いをもたらすことを知るだろう。この戦いは【主】の戦いだ。主は、おまえたちをわれわれの手に渡される。」



主の御名こそ
最大の武器

【ダビデの戦い】 I サムエル17:48～51

そのとき、そのペリシテ人はダビデの方に近づき始めた。ダビデは、すばやく戦場を走って行き、ペリシテ人に立ち向かった。

ダビデは手を袋の中に入れて、石を一つ取り、石投げでそれを放って、ペリシテ人の額を撃った。石は額に食い込み、彼はうつぶせに地面に倒れた。

ダビデは、石投げと石一つでこのペリシテ人に勝ち、このペリシテ人を撃って、彼を殺した。ダビデの手に剣はなかったが。

ダビデは走って行ってペリシテ人の上に立ち、彼の剣を奪ってさやから抜き、とどめを刺して首をはねた。ペリシテ人たちは、自分たちの勇士が死んだのを見て逃げた。



【イスラエルの勝利】 I サムエル17:52～54

イスラエルとユダの人々は立ち上がり、とき
の声をあげて、ペリシテ人をガイの谷間に至る
まで、そしてエクロンの門まで追った。それでペ
リシテ人は、シャアライムの道に、ガテとエクロ
ンに至るまで、刺し殺されて倒れていた。

イスラエル人はペリシテ人追撃から引き返し
て、ペリシテ人の陣営を略奪した。

ダビデは、あのペリシテ人の首を取ってエル
サレムに持ち帰った。しかし、武具は自分の天
幕に置いた。



【エッサイの子ダビデの名】 I サムエル17:55～58

サウルは、ダビデがあのペリシテ人に向かって出て行くのを見たとき、軍の長アブネルに言った。「アブネル、あの若者はだれの息子か。」アブネルは言った。「王様、お誓いしますが、私は存じません。」

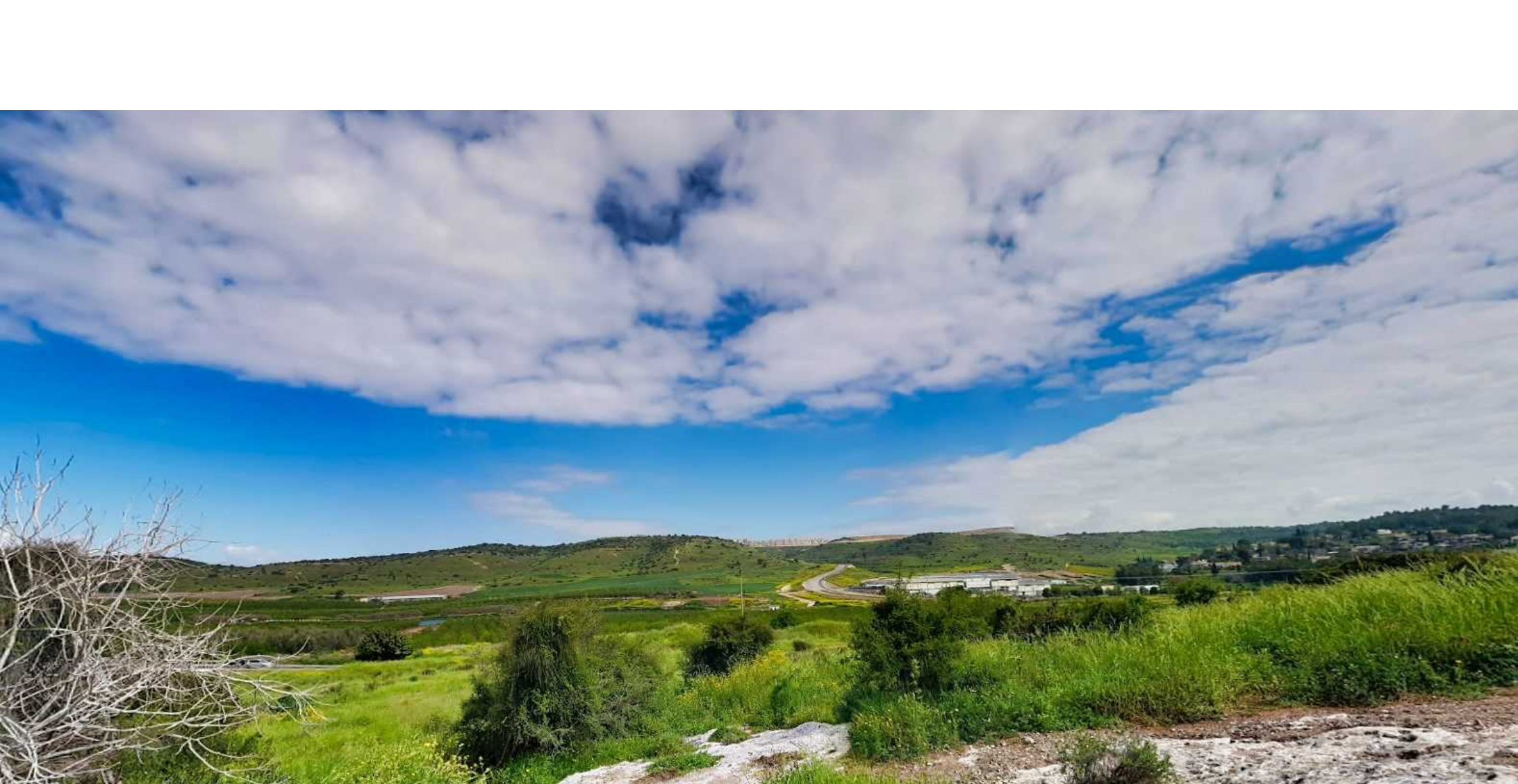
そこで、王は命じた。「あなたは、あの少年がだれの息子かを調べなさい。」

ダビデがペリシテ人を討ち取って帰って来たとき、アブネルは彼をサウルの前に連れて来た。ダビデはペリシテ人の首を手にしていた。

サウルは彼に言った。「若者よ、おまえはだれの息子か。」ダビデは言った。「あなたのしもべ、ベツレヘム人エッサイの息子です。」



初めて神の兵士と
認められたダビデ



Ⅳ. まとめと適用 信仰の武具を身につけて

エラの谷

【ダビデの戦いを振り返ろう】

- ダビデが怒ったのは、イスラエルの神が冒瀆されたため。
- ダビデに確信を与えたのは、日々共におられる主との交わり。
豎琴を奏でて主を讃え、神の力によって、獅子も熊も撃ち殺した。
- ダビデが代理人となったのは、サウルではなく、神ご自身。
- ダビデが戦ったのは、主の戦い。
ダビデが宣言し、誉め讃えたのは、神の御名。
- ダビデの戦いは、霊的戦い、つまり信仰の戦いの最高峰。

【聖霊に満たされるとはどういうことか？】

- 神の霊・聖霊は、本人の意思や信仰と無関係にくだる時がある。
例) 怪力の士師サムソンは、律法破りの常習犯。信仰的には未熟者。
- 聖霊が降り、トランス状態になる人が必ずしも信仰深い訳ではない。
聖霊体験が信仰の証しなら、ダビデより信仰深いのは、サウルだろう。
➡二度も、激しく聖霊がくだったのだから。
- 神が求められるのは、人格的交わり。信仰の成長は、一度のイベントではなく、日常的な神との交わりによってもたらされる。
- 日々積み重ねてきた神との深い交わりの上にあった、ダビデの勝利。

【ダビデの戦いの本質をこそ掴み取ろう】

- ダビデの勝利は、イスラエルの神によってもたらされた。
主への信頼・信仰こそが、ダビデの最大の武具だった。
- ダビデの勝利は、日々積み重ねてきた主との交わりの結果。
油注がれてから、ますます主への信頼を強め、歩んできたダビデ。
- 福音を信じた私たちにも、ダビデと同じ聖霊が住まわれている。
日々、主と交わり、体験的に主を知ることを積み重ねているだろうか。
- ダビデのように、主との関係を、日々深めて歩んできたか？
サウルのように、信仰が後退しきっては、いないだろうか？

【救いの本質・聖化の本質】

- 一度信じた者から、救いが失われることはない。
クリスチャンから、**聖霊**が去ることは決してない。
- しかし、信仰が後退すれば、**救いの確信**は簡単に失われる。
悔い改めとは、主に向き直って歩み始めることに他ならない。
- 罪悪感にさいなまれる人は、自分を責めるだけで歩んでいない。
信仰とは、クリスチャンの日々の**生活そのもの**。問われるのは実態。
- 今体験している私の状況は、これまでの**信仰生活の総決算**だと知ろう。
ダビデにとってのゴリヤテの戦いがそうであったように。

【主への信頼が勝利のカギ】

- 準備なく無様に敗退することもあるが、神の目にはそれも幸い。
打ち砕かれた心貧しい者をこそ、主は用いてくださるから。
- 勝利の時にも、ただ主の御顔を仰ぎ見よう。決して逸れないように。
勝利はむしろ、次の大きな試練の序章に過ぎないのだから。
- 神は愛する子を訓練される。神の国の世継ぎが、クリスチャン。
今の試練は、約束された計り知れない祝福につながっている。
- 信仰の戦いの武器は、神の約束の御言葉だけ。聖書の学びを深め、
主の知恵を体得し、ますますこの、たった一つの武器を磨こう。

御言葉に信頼し、御言葉に生きる以上の力はない!!

「天のお父さま。わたしは、み子イエス・キリストが、

①わたしの罪(つみ)を贖(あがなう)うために十字架で死に、

②墓(はか)に葬(ほうむ)られ、

③三日目に復活(ふっかつ)したことを信じます。

ダビデは、主(しゅ)を信頼(しんらい)して、巨大(きょだい)な敵(てき)に勝利(しょうり)しました。

ダビデのように、主よ。あなたとの交(まじ)わりを深(ふか)めて いけますように。

日々、主の御言葉(みことば)を 味(あじ)わい、よろこび、信仰(しんこう)の戦(たたか)いに 勝利(しょうり)を得(え)られるよう導(みちび)いてください。

主イエス・キリストのみ名によって祈ります。 アーメン」